



第41号



ECOMAIL 10

関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

日本環境教育学会 関西支部 第6回研究大会のご案内

11/22(土) 大阪教育大学天王寺キャンパス(天分)にて開催されます。

プログラム等、詳細は2ページをご覧ください

台風のために延期していた「第60回 ワークショップ」が近づいています

シンポジウム「よみがえれ! フェニックス土居川」

日時: 1997年11月29日(土) PM1:30~5:00

場所: 堺市民会館小ホール(会場も変更しましたので御注意ください)

講演: 藤本義一氏(作家)

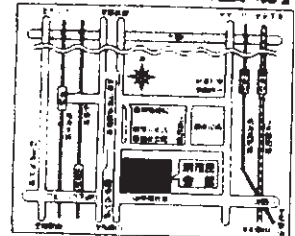
パネリスト: (パネリスト) 小田 一紀氏(大阪大学) 木津川 計氏(立命館大学)

田丸 静子氏(神戸市「新緑をいかにする会」代表) 広松 伝氏(元副都立大副学長)

参加費: 500円(資料代を含む)

主催: シンポジウム「よみがえれ! フェニックス土居川」実行委員会 ☎(0722)21-0016

【シンポジウム会場】



第41号 目次

- ・日本環境教育学会 関西支部 第6回研究大会プログラム …2
- ・滋賀大学国際シンポジウム '97の案内 …3
- ・第61回ワークショップ報告(9/27)
 - 「天理教の自然観と環境教育」(佐藤孝則) …4~5
- ・連載企画: 開催迫るCOP3京都会議
 - 「京都温暖化防止会議(COP3)と市民的対応-その3-」(井上有一) …6~7
- ・ネットワーク …7~8

11/22 日本環境教育学会 関西支部第6回研究大会プログラム

9:30 受付開始

一般講演

A会場 (13教室)

- 10:00 井上晴貴 (大阪市立矢田南中学校)、山本勝博 (大阪府教育センター)
「初瀬川の水質調査 -大和川の源流を求めて-」
- 10:25 木村貴 (堺市立金岡小学校)、山本勝博 (大阪府教育センター)
「土器による海水からの塩作りの教材化と実践 -古代人の塩作りを学ぶ-」
- 10:50 藤岡達也 (大阪府立勝山高等学校)
「総合的な環境学習への期待と課題 -高等学校「総合理科」の現状と問題点-」
- 11:15 田先崇志 (兵庫県立番寺高等学校)
「高校生の環境教育に関する意識の国際比較研究 -日本と大韓民国との比較-」
- 11:40 田伏政昭 (和歌山県立向陽高等学校)
「環境学習における実地研修」(仮題)

B会場 (12教室)

- 10:00 高島耕一郎 (吹田市立山田中学校・吹田自然観察会)
秋山こずえ (大阪北生協・すいた市民環境会議)
「市民による古木・大木調査(吹田市)」
- 10:25 山田弘司
「環境教育 宗教の今日的意義を問う -神道・仏教の視点より-」
- 10:50 松永三姉緒 (大阪薫英女子短期大学)
「イギリス・ヨークに学ぶ都市環境学習」
- 11:15 本庄真 (香芝市立真美ヶ丘小学校)
「自然文化史研究の試みと現代的意義」
- 11:40 福島古 (環境教育学会関西支部世話人)
「築こう環境教育学を-第9回大会(大阪)特別集会に向けて-」(仮題)

12:05 昼食

*パネル展示(12教室において全日展示しております)

すいた市民環境会議・吹田自然観察会「市民による古木・大木調査(吹田市)」

13:00 関西支部 第3回総会 (12教室)

13:30 休憩

特別講演 (12教室)

- 13:40 スティーナ・ヨハンソン氏 (スウェーデン野外生活推進協会)
「スウェーデンにおける環境教育」(通訳あり)

15:00 休憩

特別ワークショップ (12教室)

- 15:10 「COP3を知ろう -環境教育はどうかかわるべきか-」
話題提供: 山本幹彦 (京都ユースホステル協会)
コーディネータ: 鈴木善次 (大阪教育大学)
その他NGOで活躍されている人たちの参加を予定しております。

17:10 閉会

17:30 懇親会 (会費3,000円、学生1,500円)

学生ホール2階大会議室

○日時: 1997年11月22日(土) 9:30~17:10

○会場: 大阪教育大学 天王寺キャンパス 本館南側1階

○主催: 日本環境教育学会関西支部

○参加費: 1,000円(学生500円)

○お問い合わせ先: 第6回研究大会実行委員会事務局

大阪教育大学 環境科学教育(鈴木)研究室 Tel&FAX 0729-78-3381

滋賀大学国際シンポジウム'97

1997 Shiga University International Symposium

～環境問題の解決を目指した環境教育と情報支援システム～

What Can Education and Information Systems Do
To Solve Environmental Problems?

開催の趣旨 1997年11月22日(土)～24日(月)

環境問題を教育の側面から取り上げ、問題の解決に環境教育の果たす役割とこの教育を地球規模で推進するための情報支援システムのあり方について討議するために、国際シンポジウムを開催します。国内外から16名の招待講演者を迎えて、「環境問題の解決を目指した環境教育と情報支援システム」というテーマで議論を深めます。多くの方の参加をお待ちしています。

滋賀大学国際シンポジウム'97 実行委員会委員長

滋賀大学長 加藤 幹 太

[本会議] 大津市生涯学習センターホール

22日(土) 9:10～18:00

開会式 9:30～9:50

第1セッション 10:00～12:40

「アジア太平洋地域の環境問題と人々の環境意識の変化」

第2セッション 14:30～18:00

「アジア太平洋地域における環境教育の実践と課題」

23日(日) 9:20～17:45

第3セッション 9:20～12:30

「情報支援システム・遠隔教育と環境ネットワークの役割」

第4セッション「総合討論」 14:15～17:45

「環境問題の解決を目指した環境教育と情報支援システムのこれからの課題」

[サテライトシンポジウム] 「環境問題と環境教育」

24日(月) 14:00～16:00

ミシガン州立大学連合日本センター(彦根市)

海外招待者

Bramby, Edwin: Director, Learning Resources Services, Deakin University, Melbourne, Australia

Chaisora, Sirmsree: Associate Professor in Curriculum and Instruction, Faculty of Education, Chiang Mai University, Thailand

D'Itri, Frank M.: Associate Director, Institute of Water Research, Professor, Michigan State University, USA

Kim, Jung WK: Professor, Graduate School of Environmental Studies, Seoul National University, Korea

Le Grew, Daryl: Deputy Vice-Chancellor and Vice-president (Academic), Deakin University, Victoria, Australia

Meadows, Peter S.: Senior Lecturer, University of Glasgow, Scotland, UK

Sani, Sham: Vice-Chancellor, Malaysia UKM University, Malaysia

Seerjani, Mohamad: Professor, University of Indonesia, Indonesia

Sudara, Saraphol: Head, Department of Marine Science, Chulalongkorn University, Thailand

Tan, Merle C.: Science Education Specialist, Institute of Science and Mathematics Education Development, University of the Philippines

国内招待者

吉良 竜夫: (財) 国際湖沼環境委員会・副理事長

坂元 昂: 国立メディア教育開発センター・所長

白井 重樹: 滋賀県教育委員会学校教育課・指導主事

末石高太郎: 滋賀県立大学環境科学部・教授

戸田 孝: 琵琶湖博物館・学芸員

中村 正久: 滋賀県琵琶湖研究所・所長

申込先 〒522 彦根市馬場1-1-1 滋賀大学庶務課

電話: 0749-27-1005, Fax: 0749-27-1129

天理教の自然観と環境教育

佐藤孝則（天理大学）

1. 天理教における自然界の認識

天理教の三つの原典のうちの一つ、即ち「おふでさき」と「みかくらうた」の冒頭には、ほとんど同じ内容の表現が記載されている。これは、天理教の教えを要約したものである。そこで、「みかくらうた」の中から主な表現を抜き出し、それらを解説する。

このたびはかみがおもてへあらはれて なにかいさいをとききかす (第三歌)

ききたくバたづねくるならいうてきかす よろづいさいのもとなるを (第六歌)

かみがでてなにかいさいをとくならバ せかい一れついさむなり (第七歌)

ここに出てくるいさいとは、ここでは、「元なる親神様の造りたまひ、顕現したまう宇宙の森羅万象の末ずえに至るまで」のことで、よろづとは「宇宙の森羅万象」のこと、そしてせかい一れつとは、「世界中の人類はもとより、生きとし生けるもの、草も木も農作物、家畜に至るまで」のことで解釈されている。即ち、よろづいさいとは「親神が創造された宇宙の森羅万象」のことで、せかい一れつとは「人間を含むすべての生きとし生けるもの」という意味になる。これらの解釈は天理教が環境問題を認識するための重要な視点だといえる。

「おふでさき」に、次の表現もある。

このよふを初めた神の事ならば せかい一れつみなわがこなり (四号62)

せかいどういちれつわみなきよたいや たにんとゆうわさらにないぞや (十三号43)

一れつのこどもハかわいばかりなり とこにへたてわさらになけれど (十五号69)

ここでは、森羅万象すべては親神のもとでは子供であり兄弟姉妹の関係にあること、そして、森羅万象のすべては等しく平等の関係にあることが書かれている。即ち、天理教では、「自然破壊」は森羅万象の兄弟姉妹を傷つけることであり、これによってたすけを求めている生きとし生ける兄弟姉妹たちに救いの手を差しのべることは、当然の行為だと考える。

さらに、「おふでさき」に次の表現もある。

たんだんとなに事にてもこのよふわ 神のからだやしやんしてみよ (三号40・135)

すなわち、この世の中は親神の身体そのものであることを先ず認識し、思案しなければならぬ、という意味である。それゆえ天理教では、親神のふところ住まいをしている人間は、公害を発生させたり自然を破壊するといった環境の悪化をもたらす行為を、厳に慎まなければならないと説いている。自然破壊は親神の身体そのものを汚すことで、冒流行為にほかならぬと考えている。

2. 教理からみた環境問題発生の原因

天理教では、親神の思召に添わない心づかいを「ほこり」に例えて、信者の日々の心のつかい方を戒めている。特に、「陽気ぐらし」を目指す際に邪魔とされる心づかいとして、「心のほこり」を挙げている。「惜しい、欲しい、憎い、可愛い、恨み、腹立ち、欲、高慢」の八つである。環境問題をこれらの「ほこり」と関連させてみると、その本質が見えてくる。

例えば、「ゴミのポイ捨てはやめましょう」、という標語を見たり聞いたりして久しいが、一向に改善されたようすはない。むしろ、最近の日本人には、そのような道徳心が欠如しているのではないかとさえ思える。ごみ箱に入れる労を惜しむかのように、隠れて、あるいは堂々とポイ捨てをする。また、近い場所へ行くのにわざわざ車で行く。これらの労を惜しむ行為は「惜しい」という「ほこり」の一つとして、天理教では戒められている。いずれにしろ、環境問題が発生させた最も大きな原因は、人間の傲慢な姿勢だろう。

3.天理教における自然観

教祖・中山みきの話した言葉が逸話の中に残されている。

「皆んなも、食べる時には、おいしい、おいしいと言うてやっておくれ。人間に、おいしいと言うて食べてもろうたら、喜ばれた理で、今度は出世して、生まれ替わる度毎に、人間の方へ近うなって来るのやで。」

教祖は、私たちのからだに栄養物となって吸収されていく生き物に対する感謝の念として、「おいしいなあ」という言葉をかけてあげることが必要であり、結果的にその生き物はさらに活かされていくのだと説いている。

私たちは食事の際、「いただきます」「ごちそうさま」という。その言葉の中には、神様に対する感謝の気持ち、また作物を育ててくださった農家の人たち、食事を用意してくださった人たちへの感謝の気持ちも、込められているはずである。しかし、それだけではなく、食べ物として私たちの血や肉となっていく生き物たちへの感謝の念も、必要である。即ち、彼等に「美味しいなあ、美味しいなあ」という労いの言葉をかけてあげること、生き物の死に対する敬意の表現だといえる。

教祖はまた、「菜の葉一枚でも、粗末にせぬように」という言葉を残している。どのような食べ物に対しても無駄にすることなく、可能な限り食べ切ることが礼儀であり、それは、単に「食べ物がもったいない」という理由ではなく、食べ物として死んでいく（出直してくる）生き物たちへの感謝の念でもあり、とりあえずの「お別れの挨拶」でもあると説いている。

私たち現在の人間は、猛獣などの天敵に襲われることは一部地域を除いてほとんどない。むしろ、一方的に動植物を食する立場にある。そのため、親神のふところ住まいをする森羅万象（世界一れつの兄弟姉妹関係）の中では、人間は、生物学でいう「寄生」の立場に位置している。そのこと故に、人間の自然界での優位性を説く考えもあるが、天理教はそのような視点をもたず、森羅万象の動物たちと対等な立場を根底に置き、たまたま人間という立場のなかで動植物を食するのであり、むしろ出直す彼らを畏敬の対象として見る視点が天理教の立場だろうと考える。その一環として、「いただきます」「美味しいなあ」という労いの言葉がある。

4.天理教における環境学習の実践

天理教には「災害救援ひのきしん隊」という組織がある。天災・人災を問わず、災害に遭った「一れつ」に救助の手を差しのべる活動である。古くは関東大震災（T.12.9.1）、最近では日本海重油流出事故（H9.1.2）の際には、速やかに救助活動に出向いている。また、全国の緑化運動にも参加するなど、環境修復活動を目的にあちこちで活動を展開している。「環境学習」という表現は使われてこなかったが、天理教では、教理に基づく環境保護活動を地道に実践している。

京都温暖化防止会議（COP3）と市民的対応（その3）

井上有一（奈良産業大学）

3. 市民的対応 — CANと気候フォーラム

気候変動の進行に関し、私たち北の市民には最初にも述べたように極めて大きい責任がある。その責任は一つに自らの日々の生活において果たされるべきものであり、例えば、エネルギー利用の少ない、あるいは廃棄物発生が少ない生活を実現していくことであろう。しかしながら、この責任はこのような個人的な言わば「こころがけ」のレベルに留まるものではない。その責任は過剰消費や資源浪費に特徴づけられる私たちの社会の構造を根本的に変革するという社会的、政治的レベルでも果たされなくてはならない。ここでいう政治的行動とは、学習会や情報交換なども含め自分自身の問題理解を深めることから、投票や市民イニシアティブ、署名、デモやロビイング、研究、情報発信を始め市民／市民セクター／NGOとしての取り組みなどさまざまである。以下に、この二つ目のレベルにおける市民的対応について、現在の状況を見ていきたい。

気候変動枠組み条約に関わる条約／議定書交渉は、幸い、1992年リオ地球サミット（国連環境開発会議、UNCED）やそのフォローアップとして設置された国連サステナブル・ディベロプメントに関する委員会（UNCSD）と同様、環境NGOに対し比較的開かれたものであった。一定の条件・資格を満たす環境NGOは、登録し承認されることにより、交渉の場にオブザーバーとして参加でき、ワークショップや会合を開催したり、また政府代表団に直接働きかけたりする（ロビイング）ことができる。この機会を最大限に活かしてきたものにCAN（Climate Action Network）がある。CANは世界各地の気候変動問題に関わる環境NGOの連合体であり、日本からも現在5団体が参加している。このネットワークは、全体として高度な科学的知見、交渉に関わる各種の情報、政策分析力、政治的判断力を有し、短期的な自国経済に対する影響の配慮など国益に縛られた政府間交渉に、環境持続性や社会的公正を保障していくといった長期的な安全保障の観点から、あるいは地球益、草の根益（市民益）といわれる観点から、少なからざる影響を与え、高い評価を得ている。国境を超えた地球市民意識の現われの一つの顕著な例をここにみるることができる。環境問題への人類の対応が進歩していくためには、こうした狭い国益や短期的利潤追求に縛られない市民セクターの関与が欠かせないのである。

1995年、COP1（ベルリン気候サミット）を迎えたドイツの環境NGOの対応にも注目すべきものがあつた。Klimaforum（英語では、Climate Forum）と呼ばれるNGOの連合組織がこのために作られ、情報収集と発信、国内外のメディア・キャンペーン、シンポジウムの開催、南の環境NGOの招待、そして世界からCOP1に参加する環境NGOの受け入れなどに大活躍した。COP1開催中の大自転車デモは市民の関心の高さを示し、政府間交渉に対する圧力として有効に働いたと言われている。COP3に向け、日本でも、気候フォーラムと呼ばれるネットワークが設立された。設立後5ヶ月が経過した現在、およそ100の団体と多数の個人が参加している。気候フォーラムの目的は大きく二つに分けられる。一つはCANのメンバー団体をはじめ国内外の環境NGOが議定書交渉に効果的に関わることをするための条件整備（情報の収集と提供、会議施設や通信装置などの確保、入国手続きや宿泊などに関するサポート、南の環境NGO参加のための資金の準備など）、もう一つは気候変動問題やCOP3の重要性に関する市民の理解や意識を深める環境啓発活動である。これらのことは、COP3で環境面から見て意味のある議定書が採択されるための不可欠の要因であると考えられる。この二つ目の目的は環境教育の性格を持つものであるが、具体的には、全国規模での学習会／シンポジウムの開催、学習冊子（気候変動問題入門、条約交渉、運輸／交通、廃棄物／リサイクル、生物多様性、食料生産、健康、エネルギー、まちづくり、ライフスタイル、子供たちの未来、の11タイトル、原則として10-20ページほどの小冊子で温暖化問題をそれぞれの観

点から概説したもの)の制作、パネル/スライドの制作、自転車キャンペーン、メディア・キャンペーン、ニュースレターの発行、関連事業/イベントの後援・協力などが行なわれている。また、環境教育を専門とするタスク・チームが発足し、本格的な活動を開始しようとしている。

◎気候フォーラムの連絡先◎

〒604 京都市中京区高倉通四條上ル高倉ビル3階305

電話：075-254-1011、ファックス：075-254-1012

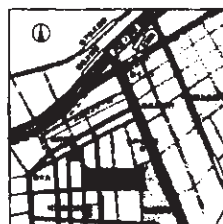
電子メール：kikofrn@mxr.meshnet.or.jp

ホームページ：http://www.jca.ax.apc.org/~kiko97/index-j.html

第1セクター(政府)や第2セクター(企業)に比べ第3セクター(市民)の力が弱いとされる日本において、COP3はその重要性から市民セクターにとりあまりにも大きな負担であるとの見方が存在する。しかしこの機会を日本の市民セクターが成長する契機として動的に捉える方がより生産的であろう。事実、気候フォーラムは情報や経験、資金の不十分さから手探りで進むことを余儀なくされているが、国外の環境NGOからは極めて高い評価と厚い支援を受けている。そのような取り組みのなかで、政府・自治体・メディアと市民セクターとの関係が変化し始めていることをはっきりと示したのが、3月に京都国際会議場で気候フォーラムが開催した気候変動問題国際NGOシンポジウムであった。

環境持続性と社会的公正が環境教育の求める価値と矛盾しないのならば、気候変動問題は環境教育の最重要テーマの一つになろう。この問題は、上に見たように、北の資源消費の過剰性を余すところなく問い、経済成長至上主義との決別を私たち北の市民に迫るものである。例えば通産省は「実現不可能な目標(二酸化炭素排出削減目標)を掲げるのは無責任な行為である」という。しかし、「実行可能」とされる政策/措置をいくら積み上げても、環境持続性や社会的公正の面から要請される排出削減量にはとうてい及ばないのである。このギャップを埋める政治的意思は市民が作り出すべきものである。高い目標が設定されることにより、ある時点で「実現不可能」と言われたものが「実現可能」になっていくことを人類は幾度も経験してきている。自動車排気ガス規制やフロン生産全面禁止はそのよい例であり、そうした経験を今一度思い起こすべきであろう。エコロジカルな未来の実現のためには、現代産業文明の環境/社会問題が集約される気候変動/地球温暖化といった挑戦的な問題に鋭い問題意識と責任をもって主体的に取り組む「地球市民」が育っていくことが欠かせない。ここで環境教育が果たすべき役割の大きさは想像に難くない。(1997.5.5.)

なつとわーく



国際協力セミナー 人口問題・食料不安・地球のリソース

いま地球環境に何が起きているか

米田ワールドウォッチ研究所所長

レスター・R・ブラウン氏を迎えて

日時：平成9年11月27日(木) 14:00~15:30(開場13:30)

会場：神戸朝日ホール(JR三宮駅より南西へ徒歩約10分)

参加料：無料 定員：500人

主催：神戸アジア都市情報センター、財団法人神戸国際協力センター

問い合わせ・申し込み先：財団法人神戸国際協力センター ☎078-291-0641 FAX078-291-0691

日本環境教育学会 前事務局長 **阿部 治氏 来阪**

11月25日(火) 15:30~17:00

吹田市立教育センター 2F 視聴覚室

ネットワーク

内容: **「環境教育のうねり」**

問い合わせ: 吹田市立教育センター(☎06-388-1455)担当は矢橋良栄先生

自然観察インタープリター ステップアップ講座

場所: 花背山の家

日程: 11月29日(土)・30日(日) 1泊2日

(29日は15:45現地集合、30日は14:30現地解散予定)

講師: 片山 雅男氏(同志社女子大学講師・夙川女子短大助教授)

久山喜久雄氏(フィールドソサイエティー代表)

費用: 7000円(学生6000円)

問い合わせ・申し込み先: フィールドソサイエティー自然観察インタープリター講座担当

(☎075-752-4582 FAX075-752-4583)

橿原市昆虫館の催し

◆第22回昆虫セミナー「悪者になりたくなかったハダニの話」

11月30日(日) 13:30~15:00頃

講師: 井上 雅央氏(奈良県果樹振興センター)

◆第17回観察教室「橿原市昆虫館 クイズ・ラリー」

12月14日(日) 13:30~15:30頃

◆冬の虫観察会

平成10年1月25日(日) 10:30~15:00頃

問い合わせ・申し込み先: 橿原市昆虫館 ☎0744-24-7246

わつとわーく

スウェーデンの環境教育セミナー「子どもたちを自然のなかへ」

《スティーナ・ヨハンソン氏来日講演とワークショップ》

日時: 平成9年11月27日(木) 10:30~16:30(受付10時)

会場: 大阪市立環境学習センター(愛称: 生き生き地球館)

スティーナ・ヨハンソン氏(スウェーデン野外生活推進協会)の他に鈴木善次氏(大阪教育大学)高見豊氏(日本野外生活推進協会)が講師陣に加わります。

問い合わせ・申し込み先: 生き生き地球館 ☎06-915-5801 FAX06-915-5805

関西ECOMAIL

第41号 1997年11月12日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室) 気付

☎582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

(☎&FAX 0729-78-3381[直通])

第41号は 1997年1月8日発行予定 原稿必着期限12月26日

5月

5月12日

(8)

5月23日